

こころ日記「ぼちぼち」④

地域で性教育の民間研究会の滋賀支部のサークルを立ち上げてから33年になった。

性教育元年と言われたころで、セミナーを開催すると多くの人が参加し会員になってくれた。その業界では著名な人を招聘するなど、とてもやりがいがあった。学校現場でも、まだ先生たちは元気だったから、学びたい実践したい人がセミナーで模擬授業の発表を希望する人も少なからず一定数いた。しかし、20年前の性教育バッシング以降、性教育への実践は萎んでしまった。今もその状況は続いている。今サークル活動は、ほとんどしていない。セミナーを開催しても赤字になるからだ。

学校での性の健康教育の実践

一方で「思春期保健相談士」の資格を持つ自身が、県内の出前性教育に行くことは多くなっている。学校での性教育が進まない中、行政は外部講師を使っての性教育は推奨している。

その一つで行政が予算をつけ推奨しているのが、2024年度からの県の「プレコンセプションケア」事業である。つまり「妊娠・出産に備えての健康管理」のあり方の指導だ。いわば少子化対策の一つだと言つていい。これを「性教育」として実践すると称しているが、私たちが目指す包括的性教育とは随分とかけ離れている。きっかけとしてしないよりした方がいいと思っているが。

実は自身も講師登録を勧められて登録したが、いまだに「プレコンセプションケア」からの依頼はない。無料で講師を招聘できるので、予算の少ない学校は利用しやすいはずが、依頼数はあまり伸びていない。

学校では、性教育を実施していないわけではない。保健体育という教科の中で扱われる項目もある。教員に任せられている実態があり、これは昔から同じだ。場合によっては管理職の考えが反映されている学校もある。

今色々な学校への出前性教育で困るのは、学校によって子どもたちがどの程度学んでいるかを把握しなければならないことだ。

義務教育の中で、どんなことを学習しているのか、事前打ち合わせで聞かなくてはならない。結果は、ほぼ小学校では「月経指導」中心、中学校は保健体育科にある事柄を学ぶのみであることがわかる。

出前性教育に行く学校へは、子どもたちへの事前アンケートをお願いしている。

最近はデジタル化が進み、子どもたちはタブレットを持っているので、フォームから直接入力できる。紙ベースのアンケートより匿名性がやや高くなるので、子どもたちの実態が見えることがある。

何のためにするのか。

- ・子どもたちが知っている性教育に関する言葉や項目の把握
- ・教員が子どもの実態を知る機会とする。

などを目的としている。

忙しい中最初は面倒がる教員もいたが、今はむしろ学校からお願いされることが多くなってきた。日々の生徒の問題に対して、子どもの実態を知りたいと思いがあるのだろう。

中学1年生のアンケート結果では、「月経」や「精通」「生命誕生」という言葉が多い。

「小学校のとき、性教育をうけましたか?」の問い合わせに、多くの女子のほとんどが「受けた!」

と手をあげる。しかし男子は、はてな?の表情。さらに聞くと、男女別での学習で、女子は月経指導、男子はビデを観ていたとのこと。このような例は珍しいことではなく、どの学校でも同じような答えが返ってくる。子どもたちは、それが性教育だと思っている傾向があることが分かる。

大人向けや大学生の講演でも、同じように「あなたはどのような性教育を受けてきましたか?」

という質問をすることがある。

8割の人が「受けた！」と答える。

ではその内容について問うと、

「学校での保健体育での学習」

「高校での避妊・中絶」

「あまり覚えていない」

など、全く統一性も系統立ってもいないことが分かる。

高校では、妊娠・出産・中絶・避妊などを学ぶようになっているが、どの程度学んでいるか学校によるのではないだろうか。

中学校での出前性教育で苦心するのが、たった1年に一回50分の授業で、「性と生」の学習で何を伝えるのかである。

最近は教員からの要望が多くなっていることの一つに、「同意」「境界線」の話だ。携帯電話（スマートフォン）を9割以上所持している中学生。教員からは、SNSをめぐる様々な問題が起こっていることに日々忙殺されているとの訴えがある。いわゆる「性加害」「性被害」の事例が目立つとのことだ。

すぐに何かができる方策はないと思っているが、たった1回の学習の中でも、子どもは変容する。そのことに希望を持っているからこそ、資料や教材に全力を尽くすようにしている。

性教育は、人との関係性の学びであり、人権学習だと思っているが、学校現場の教員の中には、そういう視点を持つ人は少ない。学習内への理解をしてもらうための事前打ち合わせを必ずしている。そこではもう教員へのミニ研修になってしまっているが、20代の教員が多い中、とても関心を持って聞いてくれる教員がほとんどなのには驚く。

こういった先生達が、自分が担任する子どもたちに、思春期の変化について科学的に人権の視点で、語ってくれる日がくるといいなと思う。

求められれば学校へ出向く日々だが、いつまでこの活動を続けなければならないのか、続けられるのか。

後継者を育てることもしていかなければと思うこのごろだ。